

現在日本のトイレ事情は、世界で最も衛生的で進んでいるといわれています。訪日外国人の中には、洗淨機能付きの便座をお土産にする方もいます。

しかし、世界では未だ多くの方が、安全に管理されたトイレを使用出来ない環境にあり、きちんと手洗いが出来ないこと、汚染された地面、地下水、川の水を用いての生活、ハエなどの虫を媒介にした細菌の広がり。これら不衛生な環境の下、一日に約千六百人も幼い命が失われているという現実があります。

お釈迦様の時代、僧侶たちの修行の場でも当初はトイレが設置されていなかったため悪臭が立ち込め、修行の妨げとなりました。そこでお釈迦様はトイレの場所を定め、設置させたという話が『律蔵』という書物に克明に記載されています。つまり、修行生活を安定的に営むためには、衛生環境を整えることが不可欠であったことを物語っています。

道元禅師は、お釈迦様の衛生的な修行環境をお手本としつつ、更に、私達の用を足すという日々の行為を仏道として捉えておられます。「きれい、汚い」という考え方では、仏法から遠ざかってしまいます。つまり、私達の身と心を調えることにより行為自体が、仏の身と心へと変えていくのです。

著書の『正法眼蔵』「洗淨の巻」で、東司と呼ばれるトイレの使い方や、そこでの用の足し方など、私達のふるまい方を微に入り細にわたって事細かにお示しになられているのは用を足す場所を仏の世界へと変え、それを行う私達を仏の身と心へと調べて行くその方法なのです。

そしてこの「洗淨の巻」の最後には、お釈迦様が修行僧達の序列の故に、たまたまトイレの横で眠ることを余儀なくされた実子で愛弟子の羅睺羅の頭を撫でながら、

「仏道を求めるために出家したのだから精進せよ。」

と激励する場面が感動的に取り上げられています。トイレという場所は私達が日々お世話になる大切な場所でありながら、必ずしも衛生的であるとは言えないが故に軽んぜられることも多い場所です。

しかし、そんな場所にあっても、いやむしろそんな場所であるからこそ、仏道を歩み出した

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

者にとっては大切な修行の場所となるのです。道元禅師の語る「洗淨」とは身と心を調える行為を大切にす、修行の道しるべなのです。

— 終 —